

洛陽平泉山莊遺址考古踏查略報

李 德 方[※] 劉 海 宇^{※※}

平泉山莊は唐代の宰相李徳裕（787-849）が洛陽郊外に建てた別荘である。山莊は私邸の郊野庭園の特徴を備え、景勝は当時最も優れていたとされている。『旧唐書・李徳裕伝』に「東都伊闕の南に平泉別墅を置き、清流翠筱あり、樹石奇幽なり」¹⁾という。康駢『劇談録』に「李徳裕の東都平泉莊、洛城を去ること三十里、卉木台榭あり、仙府に造るが如し。虚檻対引し、泉水縈回すること有り」²⁾とある。張洎『賈氏談録』に「平泉莊周囲十里にして、台榭百余所を構ふ」³⁾と見える。李徳裕『靈泉賦』に「余西嶺に居り、平壤より泉を出だし、広さ尋を逾えずして、深さ則ち尺を盈す」⁴⁾という。唐末宋代以降、山莊は廃れ果てて、後人は遂にその所在を求めがたい。今の伊闕（龍門）西南梁村溝村付近は、史書に記載する山莊の位置と基本的に一致し、世にここは山莊の旧跡と言い伝えられ、園林史学者の王鐸先生はそのために山莊の位置示意图を描き出した（図1）⁵⁾。それでは、今の梁村溝一帯は果たして山莊の旧跡であるのか。手がかりとなる歴史遺跡がある程度残されているのか。これらの疑問を抱えて、2012年の冬日に筆者たちは梁村溝付近で現地踏査を行った。ここで今回踏査の収穫を簡略に記す。

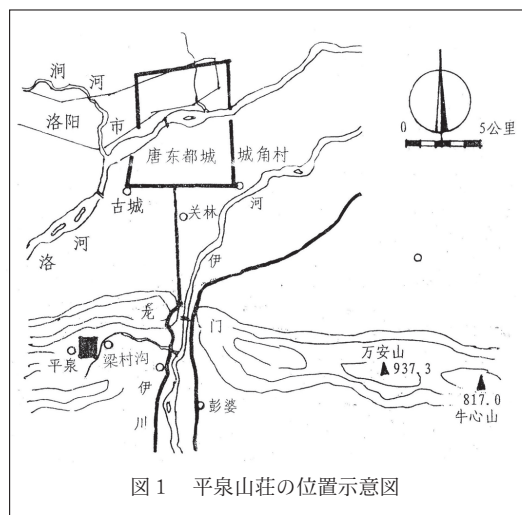


図1 平泉山莊の位置示意图

一 梁村溝の位置と踏査の区域

(一) 梁村溝の地理位置

梁村溝はまた梁樹溝といい、伊川県の西北12キロ、東北に伊闕まで5キロ、北に唐の東都洛陽城まで13.5キロ離れる。

梁村溝は伊川盆地西北部の浅山丘陵地帯に属す。伊川盆地は洛陽盆地の南に位置し、その間に伊闕

※洛陽文物考古研究所

※※岩手大学平泉文化研究センター

1) 『旧唐書・李徳裕伝』、中華書局、1975年、4528頁。

2) [宋] 康駢『劇談録』。陳植・張公弘『歴代名園記選注』、安徽科技出版社、1983年、9頁。

3) [宋] 張洎『賈氏談録』、前掲書『歴代名園記選注』により、9頁。

4) 傅璇琮・周建国校箋：『李徳裕文集校箋』、河北教育出版社、2000年、574頁。以下李徳裕の詩文はみなこれによる。

5) 王鐸『洛陽古代城市与園林』、遠方出版社、2005年、165頁。

孔道によって相通ずる。伊川盆地の中間に伊河は縦断して伊水川を形成し、周りに秦嶺東脈の山々に取り囲まれ、典型的な盆地地形となっている。盆地の東北部に少室山支脈の万安山はあり、万安山のひとつの峰は縦山と名づけられ、みな梁村溝の東にある。盆地の西に寄り掛かる鳴皋山は梁村溝の南にある。梁村溝に足を止めて、東北に伊闕、東に万安山及び縦山、南に鳴皋山と向かい合う。

梁村溝一带に丘陵は起伏し、溝澗は縦横し、地表の黄土は深くて厚い。比較的大きな河川は平泉河であり、河水は仏教寺院平泉寺（図2）のところに西南から東北へ流れて、梁村溝村の北に東へ曲がって伊河に注ぐ。平泉寺辺りの泉水は河の主要な源流で、ここに泉水が豊富である。現在、平泉寺の境内及び山門の外にそれぞれ一箇所を見かける泉水がふつふつと湧き出ている。泉水が人工で引き出されたので、ゆえに幅80mの河床に水流は弱く、一片の湿地林帯となっている。



図2 平泉寺の正面

（二）踏査区

踏査区は梁村溝村と平泉寺の中間の平泉河西岸一带にし、南北長さ1000mを越え、東西幅約200m、面積は20万平米あまりある。踏査区の南部に高速道路は横断して、踏査区を南北に二分する。また、南区をⅠ区、北区をⅡ区と称する（図3）。

二 調査収獲略報

（一）南区

平泉寺の北に平らかな台地はあり、南北の長さと東西の幅はおおよそ同じく、みな200m、面積は3万平米あまりある。地表及び断崖に数多くの古代陶器・磁器・石器及び建築材料の残骸等は散らばっている。採集した遺物の特徴と年代をつらねて述べる。

1. 新石器時代の遺物

夾砂紅陶罐 南区東側断崖から1点採集し（I-1）、手工製の罐底で、無紋、表面粗造、底径9cm、仰韶文化廟底溝類型の常用器具であり、今まで約6000年（図4）。

石斧 1点（I-2）。柄部のみ、磨製、断面は円角長方形を呈し、残高8.5cm、龍山文化時期のもので、今まで約4300年。

泥質灰陶罐 1点（I-3）。ロクロ成形、平底、底径8cm、龍山文化時期に属す。

高領瓮 1点（I-4）。泥質灰陶、表面に籃紋を施

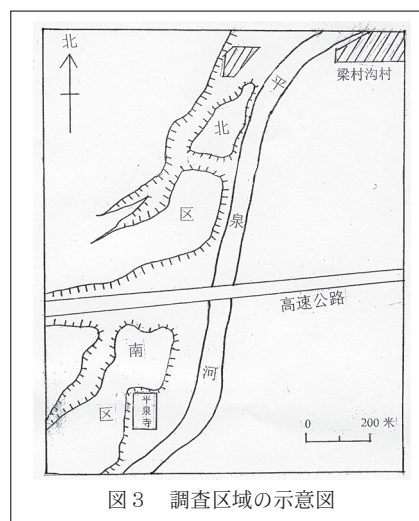


図3 調査区域の示意図



図4 仰韶文化夾砂紅陶罐発見地

し、龍山文化陶瓮の胴部残片である。

ほかに方格子紋鼎・罐及び盆の残片はある。これらの遺物によれば、先史の新石器時代中晩期にこの区域で人々は生活していたことが分かる。

2. 漢魏時代の遺物

地表に露出しているのはみな平瓦の残片で、表面に縄模様が、内面に布目が施されている。

3. 唐宋時代の遺物

遺物は建築材料・生活用具・石刻三種類に分けられる。

建築材料に平瓦・琉璃瓦・磚などがあり、平瓦が一番多い。平瓦が一般的に厚さ5cm、方縁、無紋、内面に布目があり、時代は唐宋である。琉璃瓦が1点のみ(I-10)、磁土で焼成され、表面に灰黄釉薬は施され、内面に無釉で、厚さ1.2cm(図5)、東都宮城区から出土した琉璃瓦と相似して、時代は唐代である。磚がみな型物無紋矩形磚の残塊で、厚さ6cm、時代は唐代である。

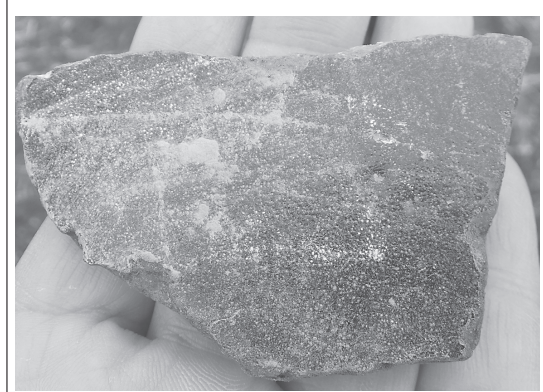


図5 唐代琉璃瓦の破片

生活用具はみな磁器の残片であり、白釉磁片・棕釉磁片・黒釉磁片三種類に分けられる。白釉磁片が3点のみ、みな磁碗の残片、その中の1点は侈口円唇、内外に黄白釉が施され(I-8、図6-1)、唐代晩期のものであろう。ほか2点の釉色は白っぽく、碗の底部や胴部の残片であり、時代は少し遅い。棕釉磁片が5点採集し、みな磁碗の残片、半釉、唐代から五代のもので、その中の1点は棕黄釉と浅緑釉ともに施釉され、「唐三彩」の残片であろう。黒釉磁片も5点採集し、大部分は圈足碗の底部(図6-2)か胴部の残片であり、1点は斂口罐の残片で、圈足に無釉であるが、それ以外の部分に灰黒釉は施され、年代はみな宋代である。

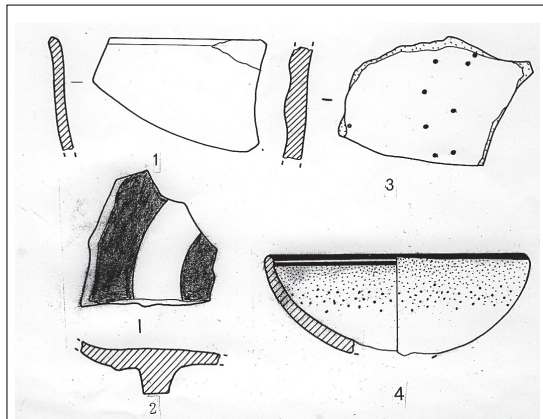


図6 唐代と宋代の磁器

石刻残段は台地の中央部に1点発見した。青灰色石灰岩質、ほぼ上部は太く下部は細い扁円体を呈し、上部長径16.5、短径12.2cm、下部長径14、短径10cm、残高15cm。正面及び正面の左右は彫刻する上に滑らかに磨かれ、転折する処は面取りされて円角を呈し、左側の下端に叩かれた深さ1.5cmの丸い痕跡はあり、背面に金槌で岩面から叩かれて脱落した破裂面はある。その石質は龍門の岩体と相似し、彫刻方法は唐代に流行した円刀彫刻法で、形体は龍門石窟唐代石刻造像の肢体と近く、岩体から脱落した唐代石刻造像肢体部の残塊であろう(図7)。

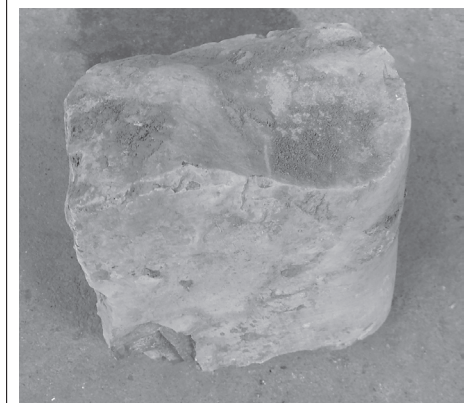


図7 唐代石刻の残塊

(二) 北区

北区の踏査範囲は北に梁村溝村から、南に高速道路まで、東に川の西岸から、西に川辺の台地まで、南北長さ700、東西幅200m、面積は10万平米あまりに達し、主に一団の建築遺跡は発見された。

1. 西岸の崖壁に露出する建築遺跡

西岸の崖壁に建築遺跡4箇所を発見し、北から南へ順次に一号建築・二号建築・三号建築・四号建築と番号をつけている。

一号遺跡 崖面の東側に位置し、北に村舎まで100mあまりある。地表以下2m、河床河原以上約3mの崖面に、南北長さ15、厚さ0.3～1.2mの瓦礫堆積層は広がり(図8)、包含遺物は主に平瓦である。



図8 一号遺跡の瓦礫堆積

瓦礫堆積層の底部は水平の硬い地面で、この水平地面が東端の瓦礫坑まで終わる。瓦礫坑の南壁高さは1mばかり、直壁、一号遺跡基壇の北縁であろう。瓦礫坑が瓦片で充満され(図9)、建築の破壊されたときに北の軒から墜落した大量の瓦礫で形成されたと考えられる。この建築が河に臨む奥行き15m以上の高台式建築であろう。一号遺跡の北の崖面に建築遺跡は発見されていない。

一号遺跡の包含遺物は建築材料の丸瓦・平瓦・矩形磚及び舗装方磚などがあり、みな泥質灰陶で、型物である。丸瓦がただ瓦礫坑に見え、無紋、内面に布目、幅12、厚さ1.5cm、最大の1点残長18cm。平瓦が無紋、内面に布目、方縁と斜方縁ともあり、完然品の1つは一端幅17、反対一端幅15、長さ21.5、厚さ1.1cm(Ⅱ-1)、もう1つは一端幅15.5、反対一端幅13.5、長さ22、厚さ1.2cm(Ⅱ-2)。矩形磚はみな無紋で、遺跡の基壇部に完全磚は見つかり、長さ28.3、幅12.5、厚さ6cm。磚の残塊は散らばり、あるものは幅14.8、厚さ5、残長17cm(Ⅱ-3)、あるものは幅14.2、厚さ7、残長15cm(Ⅱ-4)。舗装方磚の正面は平らかで、底面は粗造であり、辺の長さみな21cmばかり、厚さ2.5～2.7cmの間である。



図9 一号遺跡の瓦礫坑

4枚の磚で一体に焼結した壁の残塊は発見され、磚と磚の継ぎ目に修築されたときの粘着痕跡は残され、上層の磚はそれぞれ下層の磚より内側に2.7cm縮めて置かれ、修築法は順次持ち送り方式である(図10)。この焼結された壁の残塊はこの建築が火災で破壊されたことを物語る。

二号遺跡 一号遺跡の南13m西崖の中腹に位置し、南北長さ10厚さ0.3mぐらいの瓦礫堆積層であり、瓦礫堆積層の底部は平坦で、一号遺跡の底部と同一の水平位置に



図10 焼結磚壁の残塊

ある。中段の底部にきれいに築かれた三層の磚は見え、磚の形体寸法は一号遺跡の完全磚と同じく、二号建築の創建されたときの磚であろう（図11）。

三号遺跡 二号遺跡の南25mばかりの西崖の中腹にある。約1平米の崖面に、粗れきと川原石で敷かれた痕跡は残る。下部に粗れきで幾層下敷きにされ、上部に川原石で一層敷かれている（図12）。

四号遺跡 三号遺跡の南30mに正方体の石は2枚あり、辺長約0.8m、表面は平らかで、磨製していない。1枚は地表に半分露出し、元の位置から動いていないようであるが、もう1枚は西崖の半ばに転落している（図13）。これらの石が建築の基壇石か、或いは池の排水施設の一部であろう。正方体石の下の河原に矩形磚は散らばり、完全の磚の寸法は $30.5 \times 17.5 \times 5.6\text{cm}$ と $28.2 \times 15.3 \times 5.6\text{cm}$ と $32 \times 14.5 \times 6.7\text{cm}$ 、おそらく水渠近くの建築用磚である。

三号と四号遺跡の下の河原で、南北長さ80、東西30mの地帯に、奇怪な格好の石塊は散在している。石塊の幅と厚さはおそらく35cm、その数はかなり多い（図14）。その形は粗れきのように見えるが、ただし現地の粗れきは胡桃の実のようか片状である。また上水石（給水率の高い砂岩）に似ているが、上水石ほどの給水率はなく、且つ厚重である。太湖石である可能性は大きく、庭園景石の假山奇石のいしくれであろう。

2. 西岸の台地に露出する遺跡

河畔の台地に水池の遺跡は見え、一号遺跡の北に約30mの東西方向の断崖に位置する。露出している幅2m近くの水池遺跡から観察すると、水池が現在の地表の下1.3mに位置し、水池のへりの一部である。池底は東低く西高くて、川原石で敷かれている（唐上陽宮の池底遺跡⁶⁾と類同）。池の中に砂は堆積している（図15）。

水池遺跡の西の台地に鴟尾の破片（Ⅱ-8）は採集され、棕黄釉（図6-3）、時代は唐代の晩



図 11 二号遺跡及び中部基壇磚



図 12 三号遺跡



図 13 四号遺跡



図 14 太湖石類石塊

6) 中国社会科学院考古研究所洛陽唐城隊「洛陽唐東都上陽宮園林遺跡発掘簡報」、『考古』1998年2期。

期である。ほかに、鈞磁の碗1点(Ⅱ-7)、釉薬が鮮やか、紫紅色を呈し(図6-4、図16)、宋代のものであろう。

北区の諸遺跡の考古学年代について、包含遺物の年代やその地層関係により初歩的に推定する。第一・第二・第四号遺跡の露出する磚や瓦はよく見かける唐宋時代の建築材料であるので、唐宋時代の遺跡であることは判断できる。ただし、「唐宋」が年代の概数であり、唐代の諸段階・五代・兩宋時代に及んで、これらの遺



図15 水池遺跡

跡の創建年代・使用年代・修繕年代や廃棄年代を含む。ここでその創建年代を突き止めるべきである。

一号・二号遺跡の基礎部に移動されていない矩形磚は見つかり、創建時の遺物であろう。その寸法は $28.3 \times 12.5 \times 6$ cm、また四号遺跡の下部にも完全な磚はあり、寸法は $30.5 \times 17.5 \times 5.6$ cm と $28.2 \times 15.3 \times 5.6$ cm と $32 \times 14.5 \times 6.7$ cm で、いずれも無紋である。これらの磚が洛陽一帯によくある唐代前期と宋代初期の磚とはっきり違う。隋唐時代から宋代初期まで、矩形磚が厚重の紋様磚から薄い無紋磚へ変化していく。例えば、早期の唐東都洛陽の西垣に使われた磚は $37.5 \times 17 \times 7$ cm で、表面に半分の縄模様・手印紋・交錯条紋などは施されるが⁷⁾、宋代初期の城門磚は普通 $32 \times 15 \times 5$ cm で、無紋である⁸⁾。一号・二号遺跡の基壇用磚及び四

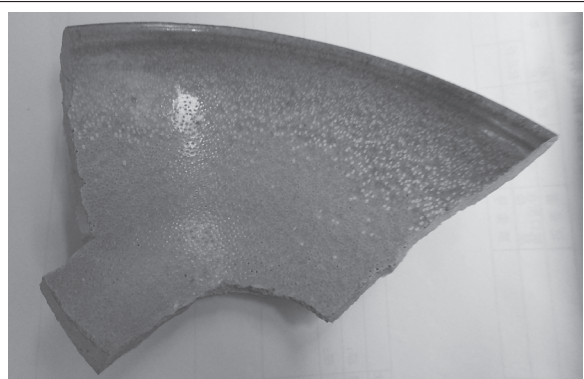


図16 鈞磁碗

号遺跡下部の完全な磚の厚さは唐代前期と宋代初期の磚の中間で、無紋で、考古類型学の「橋聯法(関連推定法)」により、その年代は唐代前期と宋代初期の中間にあり、唐代晩期に相当するのであろう。一号・二号遺跡の創建年代は唐代晩期と証明できる。なお、注意すべきなのは、三号遺跡・水池遺跡・四号遺跡等と一号・二号遺跡とは河畔に共存し、同じ唐代晩期建築の違う部分であると窺える。これは考古年代学の初歩的考察の結論である。

三 幾つかの認識

1. 踏査区は唐代遺跡である

踏査面積は20万平米あまり、南区に先史時代・漢魏時代・宋代の遺物以外、ほとんど唐代の磚と瓦等の建築材料・磁器の生活用具・石刻造像などであり、北区に相対年代は唐代晩期の建築遺跡が発見され、踏査区全体が唐代遺跡区域であると分かる。

2. 唐代遺跡区域は史書に記載する平泉山莊の位置と合致する

史書では山莊は北に「洛城三十里を去」り、「東都伊闕の南」にあると記載している。遺跡は北に

7) 洛陽市文物工作隊「洛陽隋唐東都城夾城発掘簡報」、『中原文物』1983年2期。

8) 洛陽市文物工作隊「洛陽発現宋代門址」、『文物』1992年3期。

洛城南垣まで13.5キロ、伊闕の西南5キロにあり、史書の記載と一致している。李徳裕は数篇の詩文で山荘の方位について言及している。例えば、『初歸平泉過龍門南嶺遙望山居即事』というのは、洛城から平泉へ行くには必ず龍門を迂回し、龍門の南嶺を過ぎてから初めて北に山荘を眺望するので、これを題にし、山荘が伊闕の西南にあると物語り、遺跡の方位と合致する。また、『憶晩眺』に「伊川に新雨霽れ、原上に春山を見る。緱嶺に晴虹断たれ、龍門に宿鳥還る。」ほかに、『西嶺望鳴皋山』に「遠く鳴皋山を見て、青峰原上に出づ」とある。山荘から緱嶺・鳴皋山が見えるという。遺跡から、東に緱嶺と万安山が眺められ、南に伊川の西に寄りかかる鳴皋山と向き合い、史書の記載する山荘の方位とぴったり合う。

3. 遺跡区域の地貌は史書の記載する山荘の地貌と一致する

史書に山荘は「平壤より泉を出」だし、溪流に近く、「清泉舎を繞」と記載する。清泉と溪谷が山荘の際立つ地貌特徴である。李徳裕の「余西嶺に居り平壤より泉を出だす」と言うが如し。また、その『東溪』詩に「近く東溪の水を蓄め、悠々として緑波を起こす」と、ほかにその『憶平泉山居贈沈吏部』に「清泉舎下を繞り、修竹庭除を蔭ふ」、と詠んでいる。遺跡の区域に泉と溪流がなお現存して、史書の記載と一致する。

4. 遺跡の年代は山荘建造年代と一致する

平泉山荘は李徳裕の浙西觀察使の期間に創建された。『李徳裕文集』に「前に金陵を守り、龍門の西に喬処士の隠淪空谷を得。処士天宝の末に地を避け遠遊し、近く廢れて荒榛と為る。(中略)吾乃ち荊莽を剪り、狐狸を驅り、始めて班生の廬を立て、漸く応叟の宅を成す。又江南の珍石奇木を得て、庭除に列し、平生の素懷、此れに於いて足りる」と記している。この「平泉山居戒子孫記」は後になって書かれたが、この前に一首の詩はあり、詩の全題目は「近く伊川に山居をとし、將命は図を画きて至り、欣然として感有り。聊か此の詩を賦し、兼ねて浙東元相公大夫に寄上し、青田胎化鶴を求めしむ。乙巳の歳に作る」、となる。「元相公」が元慎のこと、「乙巳の歳」が唐敬宗宝曆元年即ち825年である。これで山荘が唐代晩期の宝曆年間に創建されたことが証明でき、踏査区域の建築遺跡の相対年代と一致する。

5. 遺跡の唐代文化内包は史書の言う山荘の内包と一致する

前述したとおり、山荘は「周圍十里、台榭百余所」、「卉木台榭あり、仙府に造るが如し」。山荘が「東溪」に近く、「清泉舎下を繞る」。山荘の規模ははなはだ大きく、屋舎は典雅で、景色は清幽である。踏査区域の面積は20万平米あまりに達し、唐代遺跡の一部に過ぎず、史書に言う山荘の規模と一致する。踏査区域の一段南北長さ100mの断崖に建築遺跡は4箇所も露出している。その中に一号・二号遺跡はけだし高台建築で、基壇の高さ1mばかり、レンガの壁は持ち送り方式が見え、奥行きは10mを超え、廢棄の時に瓦礫堆積の厚さは0.5mぐらい、その構築は典雅であり、或いは「台榭百余所」の一部であろう。ここにまた水池・排水・廊廡等の施設及び太湖石の散在等は見え、みな庭園景色の構成部分であり、史書の載せる山荘の内包と照合できる。

上述内容をまとめると、踏査区は唐代遺構を主体とする遺跡区であり、その位置・地貌・年代・内包はいずれも史書の載せる平泉山荘の特徴と一致しているので、平泉山荘の廢墟と認め、平泉山荘遺跡と称することができるのであろう。

平泉山荘は唐代園林文化の重要な構成部分であり、中国ないし東アジア園林建築史の中で重要な位置を占めている。今後、関連遺跡の調査・保護・整備に更なる取り組みを期待する。